

館報

# まつやま

第17号

題字 松山篤書  
平成20年10月17日発行



通帳 ④葉鐘屋 関口金物店 柳田金三

1. 金物店の通帳 ..... 表紙
2. 上田における金物商のおこり ..... 2～7
3. 報告事項 ..... 8

財団法人

# 松山記念館

# 上田における金物商のおこり

## 「犁販売からの考察」

(財)松山記念館では、松山株式会社の創業者松山原造の日記を収蔵展示しています。特に福岡から招聘された農事助手の助手として小泉郡役所で働き始めた明治三〇年以降に記した初期の日記は、農業技術普及活動の中で双用犁製作完成に至る経過や特許取得後の販売流通に苦心したようすを知ることができま

す。ここでは、原造と金物商・鍛冶屋との親交を読み解きながら、双用犁の製造・初期の流通を支えたそれらの人々の出自を追うことよって明治期の上田における金物商の始まりを考察してみました。

### 鍛冶・金物商との親交の始まり

原造は、上田町常田の小宮

山茂右衛門(上田商工会議所第一期)五期常議員 醬油製造・味噌塩小売業)の試作田に通ううちに長岡四五兵衛に立ち寄るようになり、水苗代の播種や馬耕も手伝いました。鳥取県の中井太一郎が明治二五年に特許を取得した中耕除草器「太一車」を取り寄せてもらったり、収穫量の検査に使用する坪枡を一緒に製作したり、犁の改良について相談するなど、長岡を慕って出入りしていたようです。

明治三二年五月に犁先一枚を鍋大(鑄物師 小島次郎)から購入しています。その後、醋屋藤兵衛から犁先を三枚購入したあたりから藤兵衛とのつきあいが始まります。明治三二年六月、原造は埴科郡農会の書記となり埴科郡での農業技術普及をするかたわら双用犁の考案を重ねていきま

し、早速、一月一日の日記には「醋屋藤及中村六郎方に至り犁二挺受取りたり、之れ今回発明せるものなり」と確かな技能をもった職人とともに製造できるうれしさを綴っています。

このように犁製作の最初は犁先を小林竹司に作ってもらいましたが、後には中村六郎に鍛冶に製作を依頼するようになります。一月一日の日記には「醋屋藤及中村六郎方に至り犁二挺受取りたり、之れ今回発明せるものなり」と確かな技能をもった職人とともに製造できるうれしさを綴っています。

犁の販売においては、小諸町の柳田商店とは明治三五年五月から、大屋停車場前の薬鐘屋志津衛とは明治三六年四月から、海野町関口金物店とは明治三六年六月一日から

### 鍛冶町・常田の鍛冶・鑄物師の歴史

の取引がはじまっています。

「上田海野の鋏」と呼ばれ、江戸時代中期には木曾・松本・諏訪・高遠・伊那・川中島、更には越後や上州まで販売さ

れ評判がよかったそうです。もともと鍛冶町は本海野(東御市)にいた鍛冶が、真田氏によって築城とともに上田に地割をあたらえられてきた町です。この鍛冶職人たちは「鍛冶町以外では鋏をこしらえてはならない」という制令によつて保護され、この特権のもとに海野鋏を独占製造してきました。いっぽう、上州佐野から移り住んだといわれる鑄物をつくる職人たちは鍋屋とよばれ、鍋・釜ばかりでなく寺や神社の釣鐘・鰐口も製作し、幕末には大砲や鉄砲も製造して、異国船との対応に備えられるほどの高い鑄物技術を誇っていました。

宝永三(一七〇六)年の「信濃小泉郡常田町差出帳」には「鍛冶八人兼鋏仕候 惣次郎・七郎右衛門・徳三郎・儀兵衛・源四郎・茂七・作右衛門・太郎兵衛」「鍋屋三人 久兵衛・大次郎・八郎次」の名が記されています。

「信濃国小泉郡上田城下町差出帳」には鍛冶町の鍛冶として三二人「作兵衛・重藏・



明治30年代 上田の鍛冶・鋳物師・金物商の所在

助彌・安兵衛・善六・忠次郎・文五郎・清七・久兵衛・助藏・与五兵衛・文四郎・源七・千助・彦左衛門・孫七・庄兵衛・甚七・市之丞・甚右衛門・伊助・傳八・久右衛門・源藏・才兵衛・孫藤七・源四郎・權九郎・作兵衛・九郎・彌右衛門・傳助」の名

前があげられています。原造が惣先の製造を依頼した中村六郎は、その中のひとり、才兵衛の末裔ということでした。中村六郎は、海野鍛冶を作る特権をもっていた上田鍛冶町の江戸時代から続く鍛冶職人の出身であったということを知りました。

### 日記から拾うと

【長岡四五兵衛】明治三〇年五月九日長岡氏の水苗代播種 六月三〇日長岡方で太一車の代金、一円を支払う。八月一七日、大門村松山謙三より太一車の立替代一円入金。一〇月二日長岡方に至り坪枿を竹にてつくる。十一月九日長岡の田を馬耕。明治三一年六月七日、小刀一挺を一〇錢で購入。十一月二四日長岡方で改良犁の相談。

【醋屋藤と鍛冶職人】明治三二年五月二二日、犁先を買う。犁先三枚を和村に送付。六月七日馬耕器の件で種々談す。一月一九日シャベル一挺代七〇錢。明治三三年二月八日長岡四五兵衛を問ふ、不在なりし故、直ちに返り醋屋藤に至り鉄板の件

### 金物商の出自

【長岡四五兵衛】

を談す。明治三四年一月一〇日醋屋にて買物。三月八日南川藤兵衛氏を問へたるも、病氣中にて面会を得ず、製作に関し種々相談をなす。又、南川氏を問へ三円以内にて出来の相談をなす。三月一二日醋屋藤に依託販売の件を照会。三月一七日醋屋藤に至り鍛冶屋小林竹司方に至り犁の件種々談す。三月一九日醋屋に行き、鍛冶屋に行き（蚕業学校にて試運用する）犁は二五日程り（に出来上がる）の約束。四月一八日醋屋に行き、印判師の処に行く。四月二二日四月二二日小宮山茂右工門、長岡支店及び祐三郎、醋屋藤を問ふ。五月一九日醋屋藤及び中村六郎を問へ種々犁に関する件談す。五月二四日中村方に行き、雛形に付き午後四時まで居る。七月八日中村六郎を問へ小林竹司方へも立ち寄り、醋屋藤に至り勘定をなす。十一月一日醋屋藤及び中村六郎方に至り犁二挺受取りたり。之れ今回発明せるものなり。十二月一二日日本日醋屋より前精算の残金をスパナにて受け取る。

長岡家は仙石氏時代から藩中となり鉄具師として勤務していたようです。「松平家文書 明細三」という上田藩で召し抱えた家来の職歴を綴った記録に、長岡四五兵衛の名前を見つけることができました。初代長岡文四郎（四五兵衛という名は二代目から記載されている）は文化八（一八一）年より上田藩の納戸支配として召し抱えられていて刀鍛冶鉄具手伝いから坊主格にとりたてられました。二代目長岡四五兵衛（寿平）は天保期に時計番を務め、三代目は幕末に軍務庁判事支配の器械司という部署で書算を兼ねた銃工師として仕えています。刀工としても名が残り、寿直 四五兵衛。廃藩後は鍛冶町に住んでいました。文政七（一八二四）年生まれで明治三一年三月に七六歳で没。四代目の四五兵衛は幼名小源次、嘉永五（一八五二）年に生まれ、常田に移り住み大正



長岡四五兵衛 (長岡晴子氏所有)

九年に七〇歳で没。原造が長岡家に入りましたのは、三代目四五兵衛の亡くなる一年ほど前からになります。

「明治五年九月 鍛冶町居屋敷」(柳沢暢宏文書)には、下鍛冶町の西側に長岡四五兵衛(寿直)の住まいがあり、向かいはやはり刀工の弟、長岡久四郎(寿近)が住んでいました。荒井岩雄氏作成の「明治三十七年鍛冶町図」では長岡久四郎の名前はありますが、四五兵衛の名はありません。四五兵衛はその後、常田に転住したとされ、原造の日記にも「常入長岡ヲ訪問 蟹爪ヲ持チ帰宅」と記され、常田(明治九年、常田村・踏入村が合併して常入村に。明治

二二年、常入村は上田町に合併)に居住していたことを証明することができません。四代目長岡四五兵衛の孫(故 一雄氏)の妻である晴子さんの話によると、長岡家は東京に出ていた時期があり戦後に再び常田に戻りましたが、長岡家の後を継いだ四五兵衛の娘いそさんが四五兵衛の徒弟、小林小太郎の家(中常田)を親しく訪れていたことから、あるいは小林小太郎の家が四五兵衛の住んでいた場所ではないかということでした。長岡家は、小林小太郎に住居をかねた仕事場を譲って上京したのかもしれない。

四代目長岡四五兵衛の弟祐三郎(慶応元年〜明治三十五年 享年三八歳)は、刀工 寿祐を名乗り明治二八年から独立して鍛冶業を営み、子の祐次は南天神町で鉄工所を営み「松山犁」の部品を製作しました。

【醋屋藤兵衛 鋼鉄商】

『上田商工会議所百年史』に

「明治二九年 上田商業会議所 第一回会員選挙人名簿」が載っていて、事業と所得税納税額も記されています。醋屋藤兵衛(南川藤兵衛)は会員中、九番目の所得税納税者で鉄物小売として二四円五十一銭の所得税を納税しています。会員七五名の中から議員と役員が選出され、醋屋藤兵衛は第一期議員に名を連ねました。



醋屋藤兵衛 上田市立博物館  
『看板・暖簾・引札』より

上田市立博物館所蔵の「天明九年 高列御分限帳」の中に、藤兵衛の名を見つけることができました。「釜屋藤兵衛は第一期議員に名を連ねました。」

「強い霜が降りて桑栽培者が大被害を受けた年に、藤兵衛の桑畑だけ霜が降りなかったので大儲けをした」という話が伝わっていました。再興初代南川藤兵衛は、商売の上では屋号を冠し醋屋藤兵衛を名乗っています。文政九(一八二〇)

「明治二九年 上田商業会議所 第一回会員選挙人名簿」が載っていて、事業と所得税納税額も記されています。醋屋藤兵衛(南川藤兵衛)は会員中、九番目の所得税納税者で鉄物小売として二四円五十一銭の所得税を納税しています。会員七五名の中から議員と役員が選出され、醋屋藤兵衛は第一期議員に名を連ねました。

上田市立博物館所蔵の「天明九年 高列御分限帳」の中に、藤兵衛の名を見つけることができました。「釜屋藤兵衛は第一期議員に名を連ねました。」

「強い霜が降りて桑栽培者が大被害を受けた年に、藤兵衛の桑畑だけ霜が降りなかったので大儲けをした」という話が伝わっていました。再興初代南川藤兵衛は、商売の上では屋号を冠し醋屋藤兵衛を名乗っています。文政九(一八二〇)

用の電灯・電力事業を創立しました。

大正一一年の東京交通社大正上田市地図では、醋屋藤のあった場所は津久田足袋店や濱田屋肥料商になっていて、大正一一年より前に二代目醋屋藤兵衛は店を畳んだようです。

### 【関口金物店】

関口金物店を経営した関口



明治28年 関口金物店 開店記念写真 (関口愛子氏所有)

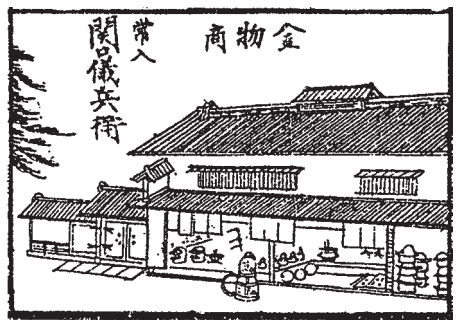
儀兵衛の系譜は、「宝永三年小県郡常田町差出帳」にあ

る「鍛冶八人 惣次郎、七郎右衛門、徳三郎、儀兵衛、源四郎、茂七、作右衛門、太郎兵衛」の儀兵衛につながるものと思われま。関口家の系図帳をみると初代関口儀兵衛は、寛永元(一六二五)年に生まれ、七郎右衛門から分家しています。宝永三年は西暦

一七〇六年なので、儀兵衛が分家した後に鍛冶職のひとりとして数えられたことが史料の上でも証明できます。

関口儀兵衛家は明治六年に生まれ昭和二〇年に七四歳で没しています。没年から推し量ると、原造の壱を販売したのは六代目儀兵衛になります。関口儀兵衛家には金物店をしていた当時の写真が残っていて、特に明治後期から大正期にかけての恵比寿講のために店の屋根正面に巨大な金物の作り物をして威勢を競った店構えを捉えたいいくつかの記念写真は当時の海野町の賑わいを知る上で貴重なものです。関口金物店は第二次世界大戦前には店を閉じています。

上の写真は、裏書きに明治二八年開店記念、創業一〇周年とあります。越前の鎌問屋、三田村甚三郎の幟旗や大阪市東区の萬金物類鉄瓶製造卸商、小山彌一郎、越後三条の銅鉄打物問屋、越中高岡の銅鉄問屋などの旗が十枚以上掲げられているのがみえます。『明治二四年 上田街諸名家一覧表』には常入の金物商関口義



常入 関口儀兵衛 『上田老舗図鑑』より

会議所会員名簿」には、「関口儀兵衛 鉄物小売

所得税納税額七円七九銭」「半田七兵衛 鉄物小売・米穀仲買 所得税納税額四円四九銭」とあります。関口儀兵衛家は常田の鋳物師半田八郎右衛門家とも姻戚でありました。

### 【柳田金物店】

小諸の柳田金物店本店

は、代々薬種を中心に荒物や小間物を販売していた柳田五兵衛から分家して文久元(一八六一)年に金物商として独立したのに始まりま。初代柳田茂十郎は、天保四(一八三三)年生まれで明治三二年四月に六七歳で没しています。二代目柳田茂十郎は大正九年に亡くなっているため、松山原造が取引をしていたのは二代目柳田茂十郎ということになります。茂十郎は分家として血縁者に茶店など異業種を経営させ、別家として奉公人に暖簾わけして金物・荒物を中心とした同業種の商店を小諸町外

の主要中心地に当店させました。別家からさらに分家や別家(二次別家と呼ばれる)がされて、柳田系商店は東信・北信地方を中心のべ八〇店以上できました。

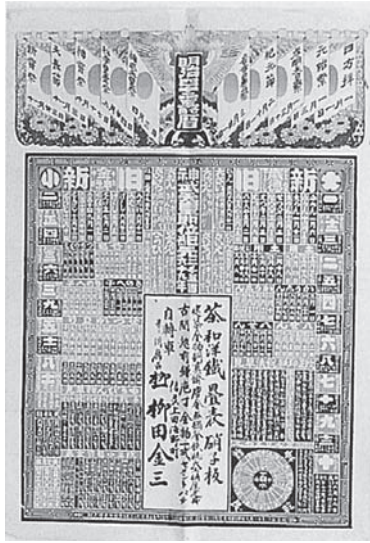
上田には明治三〇年に小宮

山金三が別家として暖簾わけして海野町に店を出し、「リュウイチ」の屋号と荷印で商いをしました。大正六年になると鍛冶町の北の下川原柳町に金子政太郎が「柳田政太郎商店」として出店しました。

柳田茂十郎は、暖簾分けする際に開店掟を直筆で渡し、商品は小諸本店を通じて仕入れることなどを取り決めてい

ました。さらに別家して出店する場合は、原則として一町内(市街地)には一店しか出店させない「一町一店主義」をとり、市場の取り合いを防ぎ各商店の商圏を確保する方策がとられていました。

確かに、原造は柳田金物店には明治三五年五月から惣を納入していますが、上田に柳田金三商店があるというのに原造の売場帳簿をみると小諸柳田本店に送っています。また、大正一二年海野町の地図には小宮山金三の柳田金物店はなく、瀬下洋服店の所有地に代わっていることから、柳田金三商店が閉じてから柳田



柳田金三 引札 上田市立博物館  
『看板・暖簾・引札』より

政太郎商店が開店したことが推し量れます。

### 【薬鐘屋志津衛 銅鉄商】

旧信越線大屋停車場前にあった薬鐘屋金物店とは、明治三六年から惣の取引があります。原造の日記や会計帳簿

では、薬鐘屋金物店は柳澤志津衛が店主になっていますが、後には弟の勝次郎に経営を委ね、志津衛は小諸の与良に戻ったということです。大正四年印刷の『大屋橋開通記念写真帳』に納められた薬鐘屋金物店の写真を見ると①柳澤勝次郎と店の名前があり、店の前に立つ人は②薬鐘屋支店の法被を着ています。勝次郎の孫の小林春美さんによると、後には畳表や建築資材を扱って昭和二〇年ころには店を閉じていたということ

です。柳澤志津衛の出自を調べてみると、『明治三六年 小諸繁盛記』の中の商家案内にも、『大正七年 小諸商工案内』にも柳澤志津衛の名前を見いだせませんでした。ようやく明治二六年印刷の商家案内

『小諸町一覽表』に「与良町 銅細工①柳澤志津衛」という広告があるのを見つけたことができた。これによって柳澤志津衛という人は元は銅細工を商っていたことを知りました。

上田市塩尻の馬場直次郎家には、寛政二(一七九〇)年に「新町薬鐘屋 喜代八」という銅細工職人が水風呂・どっこ・じゅうの・おろしの売値を報告した文書が残っています。薬鐘屋志津衛が上田市新町の薬鐘屋喜代八に繋がらないだろうかと推量してみました。前出の小林春美さんのお話では、元は小諸の人で柳澤家の菩提寺も小諸にあるということなので、薬鐘屋という屋号そのものが銅細工職人を表わす屋号で、小諸藩で銅細工をしていた薬鐘屋志津衛なのであろうという結論に達しました。

「明治四五年 薬鐘屋金物店通帳」で取引している商品の内容を調べてみると、松山製の販売もしていますが、スパンなどの工具や針金・釘の

他に大量の鉄材を調達していたことがわかりました。明治四五年に薬鐘屋へ支払った鉄物代金の合計は、約七百円。その他の工具代が約九十五円。一方、松山製の売上げ代は、五十円七十銭でした。薬鐘屋志津衛は、松山製製作所で使う大量の鉄材を鉄道で取り寄せて、大屋停車場から東上田(現 東御市和)の工場へ納入していたということが明らかになりました。

小諸市与良町で薬鐘屋志津衛の店のあった場所を探したところ、道路拡張の際に数メートル建物は後ろに曳き移されたものの薬鐘屋金物店の土台や大黒柱を残し熊木仏具店が商いをしておられることがわかりました。曳き移す前は、庭には築山があり石灯籠などもあったということです。

旧北国街道沿いの与良町には、薬鐘屋志津衛の店から数十メートル北に帝国牛馬会社を経営する小山五左衛門の家がありました。おそらく明治二九年大屋停車場が開設さ



①薬罐屋支店 柳澤勝次郎『大屋橋開通記念写真帳』より

本市で買った植木を貨車で上田に運び、別荘に植えた」など豪放に暮らした逸話も伝わっています。

「明治二九年 上田商業会議所第一回選挙人名簿」にある所得税納税額をみると、南川吉作（後に二代目 醋屋籐兵衛）は二四四五一銭、関口儀兵衛は七四七九銭、半田七兵衛は四四九銭で、金物商の中では、醋屋籐兵衛が群を抜いて所得があったことがわかります。

れるのにもなつて小山五左衛門が帝国中牛馬会社大屋支店を設立する際に、柳澤志津衛は五左衛門に誘われて依田窪地域（丸子・長門・武石・和田）の商業圏を見込んだ金物販売をしようと出店したのもと思われまふ。

### 金物商の隆盛

明治時代の中ごろに威勢をはつていた醋屋籐兵衛は、二代目醋屋籐兵衛が継いだ後も資産が相当あり、「吉原の植

がわかります。

二代目醋屋籐兵衛は、上田商工会議所の議員を明治二九年五月から明治三三年五月まで二期務めますが、明治三五年五月からは、弟で蚕卵台紙や学校用品を扱う南川治三郎が大正四年一月まで七期議員をつとめていて、次第に兄籐兵衛よりも弟の治三郎の店が隆盛したことが推し量れます。関口儀兵衛は、明治四〇年四月から三期議員をして、大正八年から二期上田市議会議員も務めました。

### おわりに

双用犁を発明した松山原造の起業に関わった人々を調べていくうちに鍛冶・鋳物師に関わりの深い鍛冶町や常田に拠点のある人々であることがわかってきました。

新しく導入された農業技術の道具として中耕除草のため太一車を取り寄せてもらったり、蟹爪の直しや坪杵の製作も世話になった長岡四五兵衛は、実は刀工であったことがわかりました。

また、明治三三年初冬に納得のいく双用犁を完成させた原造が品質のよい犁先をつけるために製作を依頼した上田鍛冶町の中村六郎は、「上田海野の鋏」の独占製造をしてきた鍛冶集団から選ばぬいた鍛冶職だったのだということ

を改めて知りました。さらに犁販売の初期段階で小売を依頼した金物商の醋屋籐兵衛・関口儀兵衛・薬罐屋志津衛は、いずれも歴史のある鍛冶・鋳物師の出身であることも判明しました。

双用犁の特許を申請し製造をはじめた明治三四年は、原造はかぞえ二七歳、醋屋籐兵衛は三六歳、六代目儀兵衛は二八歳、長岡四五兵衛は四八歳ということになります。

心血をそそいで完成させた犁を製造販売していくために、信頼のおける取引先を原造はそろえていきました。

（学芸員 田中壽子）

### 参考文献

『上田小泉誌 第二巻歴史編下』  
小泉上田教育会 昭和三五年

『上田市誌 ⑩』上田市 平成一四年

『上田近代史』上田市 昭和四五年

『上田市史 下』上田市 昭和一五年

『上田商工人名録』明治四一年  
『商工録 分冊』日本商工会刊  
昭和三六年

『海野町史』中澤好富著 昭和五三年

『常田の歴史』半田信夫著 昭和六一年

『原町の歴史』田辺寛二郎著 昭和六一年

『上田老舗図鑑』滝沢主税編 平成一六年

『ふるさと上田の地名』滝沢主税著 平成一一年

『上田商工会議所百年史』平成一〇年

『小諸繁盛記』塩川友衛著 明治三八年

『小諸市誌 近代・現代編』小諸市 平成一五年

『近代日本の地域形成』「商家同族集団の変質と地方都市の変容」

河野敬一著 平成一九年  
『信州の鉄』上・中・下巻 今井泰男著

## 第十六回文化講演会の開催

平成十九年九月二十九日松山記念館主催、上田市・上田市教育委員会後援で、松山株式会社三階ホールにて、第十六回文化講演会が開催されました。

講師は、上田市教育委員会文化振興課 和根崎 剛氏をお願いし、「村上義清を苦しめた真田幸隆」をテーマとして講演された。(聴講者一五二人)

講演会に先立ち主催者を代表して松山信久理事長が挨拶に立ち、今講演会のご後援を頂いた上田市、上田市教育委員会を代表してご出席頂いた小林健一丸子地域自治センター長様と、ご多忙のなか本日の講演をお引き受け頂いた和根崎 剛様にお礼を述べ、「今回は例年やつてきた農業関連から少し趣向を変えて、放映中の



大河ドラマ「風林火山」の影響で話題になっていく上田地域、地元の人達に優れた人物を深

く知り、歴史の認識を学ぶ事ができると思っていますので、ご静聴お願いします」と開会の挨拶をしました。

続いて後援者を代表して小林健一丸子地域自治センター長より挨拶を頂いた後講演に入った。まずドラマが放映された翌日は視聴者から多くの電話がかかってくる。史実との違いや、山城から見た背景の山容が異なるなどの指摘があり多くの人がよく見ているのは驚かされ、NHKの方に話をしましたら、「まだ、そこらはいいい方です、NHKには毎回、放送が終わって十分間は電話が鳴りっぱなしです」「大河ドラマはあくまでもフィクションであり歴史の事実ではない」と説明され、今回の大河ドラマはそういう意味では原作に比べて楽しさというところに目を向けて作っているドラマだと思いました。そして、県外からたくさんの方がこちらに足を運んで下さり、真田氏歴史館では八月までの入館者数が昨年の四倍を超え、上田城跡公園の博物館もかなりの入館者数があるということ、それから上田周辺では真田のことを扱った本

が大変多く売れており、書店でも売上一位・二位を占めているところが多くなってきたということなど、大河ドラマの影響の大きさを話された後、本題に入り、

- ・ 真田の伝承が沢山残っている
- ・ 角間溪谷「真田一族が居を構えた入口付近、壊された日向畑の墓跡、安智像の木像、天狗の伝説、不思議な錠の伝説」
- ・ 山本勘助と幸隆
- ・ 宿敵村上義清
- ・ 真田幸隆と川中島合戦
- ・ 長男、真田信綱
- ・ 信玄の死と真田家

等の話題を時の立つのを忘れる程に飽きさせずにお話いただき、最後に、「丸子は真田に攻められたという思いや、敵方として祖先から肩身の狭い思いをしている人もいる。旧四市町村が合併した新生上田市は、歴史上の人物を正しく評価することによって、互いの思いや悩みを解決できると思います。これから上田市という住所を使う仲間として、ぜひ真田一族のことについて少しでも良いので関心をもっていただきたいと思えます」と講演を締めました。

## 理事会・評議員会開催

★平成十九年十二月七日(金) 協同サービス(株) 二階ホールに於いて、第十八回理事会、第十九回評議員会が開催され、基本財産の運用及び平成二十年度事業計画書(案)・同予算書(案)について審議され、出席者全員

の承認を得て終了された。

★平成二十年二月八日(金) 協同サービス(株) 二階ホールに於いて、第十九回理事会、第二十回評議員会が開催され、平成十七年度事業報告書及び収支計算書並びに財務諸表(貸借対照表、財産目録、正味財産増減計算書、財務諸表の注記)の承認の件について審議され、出席者全員の承認を得て終了された。

## 新入社員の研修見学



松山株式会社 社の平成二十年度新入社員は、四月一日(火)の入社式終了後、当館を

訪れ、松山株式会社創業以来の歴史を研修した。

## 平成十九年度当館見学者

総数 一、八九八名

(内訳)

県外(含外国) 五五・五%  
 東信 二六・二%  
 北信 一三・三%  
 中信 〇・九%  
 南信 四・二%

## 逝去お悔やみ申し上げます

評議員 櫻井二三氏

櫻井氏は、当記念館創設時以来頭書の役職を努められ記念館運営にご尽力頂きました。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 第十七回文化講演会決定

日時・平成二十年十月十八日(土)  
 場所・松山(株) 三階ホール  
 講師・九州大学名誉教授 農学博士 坂井 純氏  
 演題・「日本のスキ(犁)とロータリ耕耘(うん) 作業機の発達と、国家の近代化」